



困った人を見ると 放っておけない 性分なんです。

水戸教会 秋山典央さん

秋山典央さんは、首からいつも携帯電話を下げている。近隣に住む外国人からの相談に、いち早く応えるためだ。茨城県をはじめ北関東一帯は、工場で働く外国人が多く生活している。しかし、言葉の壁に加え、日本特有の文化や習慣のなかで戸惑いを覚える人も少なくない。茨城県水戸市で中古自動車の部品販売会社「秋山商会」を経営する秋山さんの元にもさまざまな国籍の人が訪れるが、その一人ひとりの声に耳を傾け、親身になって支えている。なぜ、そこまで外国人に親切にするのか。秋山さんは、情に厚く困った人を見ると放っておけなかった父と母から受け継いだ性分なのだという。国を離れ、遠く日本で不安を抱えて生活している人びととのふれあいの輪が、秋山さんを中心に広がっている。

頼りにされる人

法華経の名句のなかに、「五観」といわれるものがあります。

真理をとおしてこの世を観る「真観」、我や執着のまじらない澄みきったものの見方「清浄観」、すべてが仏のいのちのあらわれであり、何を見ても、だれに對しても自他一体と思う「广大智慧観」、人の苦しみはわが苦しみとなり、その苦をとり除いてあげたいと願う「悲観」、一人でも多くの人を幸せにしたいという気持ちがあわき起こる「慈観」です。

私たちには遠く及ばないような境地に思えますが、じつは知らず知らずのうちに、「五観」に似たようなことをやっているのです。たとえば、人にものを頼んだときにサッと引き受けてくれると、私たちはその人を頼もしく思うのですが、頼まれた側にすると、我があつても執着があつても、二つ返事で引き受けることはできません。そう考えると、人にものを頼まれたときにいやな顔をせず、笑顔で、素直に「はい」と言わせていただく——そのような身近なふるまいのなかに「五観」のはたらきが認められると思うのです。そして、そうしたことを自然にできる人は、おのずと多くの人に信頼されることでしょう。